

「日葡辞書」に採録された食に関する語彙について
松本仲子
(女子栄養大)

目的 東北大学狩野文庫に架蔵される「南蛮料理書」を理解するためには、多面的な検討が必要であると考え、これまではルイス・フロイス「日本史」、アレシャンドウロ・ヴァリニャノ「日本巡察記」などを資料として、成立の推定を行ってきた。次いで調理方法の記述を検討するにあたっては、まず語彙の整理が必要であるところから、今回は「日葡辞書」をとりあげて、収録される食に関する語彙を採集して検討することとした。

方法 資料の「日葡辞書」は、イエズス会宣教師が日本において聴罪、説教を行うにあたって必要とされる日本語習得のために長崎のコレジオにおいて編纂され、1603年に刊行された辞書である。中世から近世にかけての日常の話し言葉を中心に、広汎な分野に亘る語が採録されている点、当時の辞書類が漢字を中心とした字書、歌の用語を収めた辞書の他には存在しなかった中であって、生活用語を研究するうえで極めて有用な資料である。岩波書店発行の和訳「日葡辞書」を底本として、それに収録される食に関すると考えられる語彙を全て採取し、分類した。

結果 採取した食に関する語彙は2826語で、「日葡辞書」に収録される総語彙数 32293語の約9%を占めた。それらを分類すると獣、鳥、虫、魚、貝、乳の動物性食品、疎菜、野性草木、穀物、果実、海草、葉草などの植物性食品、料理、菓子名、茶に関する語、調理操作、調味料および調味に関する語、酒類、調理器具、設備、供食に関する語、食事動作、食事形態、計量に関する語、売買に関する語などに多岐にわたって分類された。本報では全体の概要および動物性食品について触れるが、後者では乳酪の形態、卵の語の用法、鶏と雉の語彙上の混用、牛肉食に関する語彙などに検討の余地があると考えられた。